

平成10年9月14日

少雨に関する情報

8月下旬以降局地的な降雨はあるものの全県的には降水量少ない状態が続いている。今後しばらくの間はこの状態が続くと予想されるので、次のようなことに注意して下さい。

1. 作物

1) 水稲

早期落水により土壌水分が不足すると充実不良により品質が低下する。現在残っている「祭り晴」、「日本晴」熟期以降の品種については出穂後30日程度までは走り水でもよいので灌漑を行う。

2) 大豆・そば

大豆は土壌水分が不足すると落莢や充実不良による収量、品質の低下を招く。適宜、畦間灌水を行って被害を防止する。

そばは比較的乾燥に強いが、極端な土壌水分の不足は望ましくない。適宜、畦間灌水を行う。

2. 野菜

乾燥の害は気象条件の他に、根張りの浅い播種～幼苗期、活着期等、発生しやすい生育時期があるので、これらも考慮して管理する。なお、高温時や草勢の衰弱したものは薬害を受けやすいので注意する。

圃場は敷き草、マルチ等で畝や通路の高温・乾燥を防止する。

灌水は晴天高温の日に量を多くし、日中を避け朝夕の涼しい時刻に行う。キャベツ、ブロッコリー等のセル苗は特に乾燥に弱いので定植時、生育初期には十分に灌水する

メロンの生育後半の葉の黄化、ピ・マン等のしり腐れ、日焼け果などの障害が発生しやすくなるので注意する。

アブラムシ類、ハダニ類、スリップス類、うどんこ病等が発生しやすくなるので早めに防除する。特に、ハダニ類は高密度になってからでは防除効果があがりにくいので注意する。

3. 果樹

乾燥害は樹種や品種により多様な被害様相を示すが、巻き葉、葉の黄化などが現れ、甚だしくなると落葉等がおこり枯死するなどの障害がおきる。また、果実は肥大不良、陽光面の日焼けや生理障害果の発生等のため品質を害する。干ばつ被害は、根張りの不十分な幼木や若木、浅根性の果樹、砂質土の圃場、梅雨期の地下水位上昇で根を傷めた樹などで受けやすい。

土壌水分が減少するとまず果実の発育が遅れ、次いで新梢の伸長が止まり、その後枝葉が萎凋するので早めに灌水する。土壌水分がpF2.7～3.0まで減少したら乾燥しすぎないうちに15～20mm程度を砂地で5～7日、埴土や埴壤土では7～10日おきに灌水する。

草生圃場では草刈りして水分の競合を避ける。

草刈りやわらを樹冠下に敷いて土壌表面からの蒸散を少なくし、地温を下げ保水性を高める。必要量は2 kg / m²。

干天が続くとハダニ類、カメムシ類、スリップス類、うどんこ病等が発生しやすいので、これらの発生に注意して早めに薬剤を散布する。また、ぶどう園では天井ビニルが被覆してあると乾燥によりハダニ類が発生しやすいので、収穫が終われば速やかにビニルを除去する。

4. 花 き

育苗箱の過乾に注意する。特にセル成型トレイは乾きやすいので状況に応じて灌水回数を増やす。

ハウスに定植して間もない場合は、日中のみ寒冷紗等で遮光する。ただし徒長する恐れがあるので、活着したら中止する。

現在栄養生長中の作目（電照ギク、ストック等）では必要な草丈が確保できるように充分灌水する。またキクについては作物気象災害対策指針（平成4年3月）の183～184ページを参照のこと。

チュ - リップ球根の貯蔵中の8月及び9月の高温は生理作用に著しい影響を及ぼし、来年の生育、収量を悪化させる。また、親喰い現象も発生しやすくなるので、この時期の気温が25 以上にならないよう管理する。

ハダニ類、スリップス類、うどんこ病が多発しやすいので予防と早期防除に努める。

5. 畜 産

高温のため熱射病による家畜の死廃用及び生産物の品質、生産性の低下等が発生している。

家畜は、環境温度が24～26 以上では、体温の上昇、呼吸数の増加、採食量の減少等が見られ、特に30 を超えると内分泌に異常を来し各種ホルモンのアンバランスから体調を崩し生産性の低下や繁殖障害、疾病等が発生する。環境温度が25 程度を下回るまでは畜舎環境及び飼養管理面から次の対策を継続する。

（1）畜舎環境対策

扇風機、送風ダクト等により送風して舎内換気を行う。

風通しのよい畜舎にし、寒冷しゃ等を用いて西日対策を講じ、舎内温度を下げる。

（2）飼養管理対策

粗飼料はできるだけ良質なものを早朝、夜間の涼しい時に給与するとともに、給与回数を増やす。

冷水をいつでも飲めるようにしておく。

エネルギー、蛋白質、ビタミン及びミネラルが十分摂取できるよう飼料設計し、高泌乳牛にはバイパス油脂、バイパス蛋白質を給与する。

夜間には涼しい場所（運動場）に移動させる。

（3）飼料作物栽培対策

飼料作物は水分条件が悪く下葉が枯れ上がるなどしているところでは、収穫適期に近いものや回復が困難と判断されるものについては早期に収穫し早めにイタリアン、えん麦を播種して冬場の粗飼料確保するように努める。なを、えん麦、ソルゴの冬期立毛利用も有効と考えられる。